

---

# ラピスラズリの釈講

蜷岸 透

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラピスラズリの釈講

### 【Nコード】

N3392N

### 【作者名】

蜷岸 透

### 【あらすじ】

1999年

この年に起きたとある怪奇事件が、メディアとミステリー愛好家を震撼させた。

### 群青一家殺人事件

群青宅の書斎に集まる家族の死体。まるで箱庭のような、一種の美しささえ感じさせる現場。死亡順と殺害方法の矛盾。

それらを叩きつけられても、時効スレスレでもなお挑み続ける人間がいた。

人はソイツを特異な名前から「アガリ」と呼ぶ

## ラピスラズリの釈講

＊

もしもこれが夢ならばと

僕はふと思います

父は空の様に澄み渡る愛を

僕は海のように深く果てない愛を

私に与えてくれます

もし、もしこれが夢ならば

本当の僕は、夢の中の様に

父に、母に、愛されているのでしょうか……？

……あなたはどっ思いますか？

どうかまた、知恵を貸してください。

＊

一九九九年 六月二十八日

千代田警察署所属の新米巡査が偶然担当することになったとある事件が、彼の今後を左右することを誰も知らない。

その事件は奇怪であったが、一家心中として処理されることになる「群青一家殺人事件」

今日はあの事件から二四年と三六四日目。明日が時効という日である。

＊

大東悟は、いつも名刺交換の時に念を押さなければならぬ。

「大東で“おおあがり”と読みます。悟は“さとし”で構いません」  
重箱の隅で転がっていそうな……いや、天文学的な確率で珍しい名前を賜った彼の中学校時代は、あだ名呼びが基本。そして、その呼び名が社会人となった今でさえ使われている。

彼は警察官として日夜働き通して齢は五十。容姿は上の中。四〇後半に都庁から新設の警察所の所長を依頼されたり、別の管轄から応援を頼まれたりと、型破りな彼は所謂“エリート”だ。（同僚からは羨望の的である）

しかし決して奢らず、努力と向上心に溢れ、時の運に愛された彼を、皆は親しみを込めてこう呼ぶ。

「よお、アガリ！」

\*

二〇二四年 六月二八日

「すっかりアガリもおかしな奴だよ」

私は自宅に友人を招いていた。しかし、まさか私のお気に入りのカリフォルニアワインをもつてしても文句を言われるなんて思っていなかったが。

「あの事件は完全に一家心中でお開きだった。猫箱の中身は開かれただ。なのにお前ときたら、時効が 明日だったのにまだ気にしてやがる」

「性分なんです。許してください、マッツー」

彼はあだ名を嫌う為「忌々しい奴め……」と、ワインを呷るだけだった。

垣内 かいとう 待造 まつぞう。通称・マッツー。

もっともこれはペンネーム。彼はかなりの売れっ子ミステリー作家で、今日は私のワガママの為に現場を抜け出してくれたのだった。彼は昔から、まるで私を双子の弟のように親しく接してくれていた。私が困ると彼が助けてくれ、逆に私が彼の小説の感想をあげたりし

ていた。今回、彼は締め切り直前だというのに、文句を言いながらも参加してくれたことは、私にとってとても嬉しく、感謝しても足りない。

……まあその、高い対価も払ったわけだが……。

私はいつも仕事に遅れないように早めていた時計を直しながら、本棚の文庫スペースに目をやった。

彼の書くミステリーは、垣内自身の持つ独特の世界観、価値観、解釈が高い評価を受けている。考え方を例えるなら「十円玉について述べなさい」という問いに、大抵は「平等院が描かれている」などと答えるのが大半だろうが、彼は

「銅 九五% 亜鉛 四% スズ 一%の日本政府発行、補助硬貨。昭和二十六年から三十三年にかけて発行されたものには、縁に多数の溝が刻まれている」

そう即答するような変な男だ。

「全く忌々しい……。どうせ出世だつてこの為なんじゃないのか？」  
その通り。よくわかってるじゃないか。

私は一冊のファイルと紙を渡す。

「……これは？」

「私が用意した、答え合わせの為の資料です」

\*

「群青一家殺人事件」

千代田区某所の住宅街で起きた、一家殺人事件の呼称。

発生は一九九九年 六月二八日。

発生時刻が明確に定められていないが、死亡時刻はだいたい午後一時から三時頃まで

概容であるが、「群青氏が出社してこない」と、千代田警察署に連絡が入り、数人の警官が現場に向かったところ、群青邸の書斎にて、家族全員が死んでいた。中でも死亡状況は奇怪なもので、

父親は四本の釘で額を打たれ

母親は銃乱射で撃ち殺され

息子に到っては、自らでは届くハズがない高さで首を吊って死亡していた。

朝方から何度も連絡したが出ず、心配になって家に訪ねたところ、生活感はあるが呼び鈴に応じなかったことで警察を頼ったという。

家族構成は、父、母、息子の三人家族。父の鳶氏（四二）、母の瑠璃氏（三八）、息子の縁成氏（十二）<sup>よしなり</sup>。鳶氏は温厚。瑠璃氏は家族を深く愛し、縁成氏もよくできた息子だと近所でも有名であった。

死亡順に、縁成氏、鳶氏、瑠璃氏

死亡時の屋内であるが、全てのドア、窓に力ギがかかっていた。

ドアの力ギは玄関を除いてかからず、玄関にはチェーンも掛けられていた。書斎には、真ん中のボタンを押して施錠するタイプの円筒錠<sup>えんとうじょう</sup>が。また、後の調べで書斎から地下室へ行けることが発覚。入り口には南京錠がかかり、更にレバーを捻って開くタイプのケースロック錠が使われていた。中はトイレ、シャワー室、寝室が設けられ、書斎のような部屋には大量の生き物のホルマリン漬けと剥製、それに標本が見つかった。キッチンには鳶氏のものであると思われる血痕が見つかり、ここで殺害されたとみられる（鳶氏の額には正四角形に釘が穿れ、中にペンで円が描かれていた）。しかしその場合、誰が書斎に運んでいったかが定かではない。書斎には物は本棚と机ぐらいしかなく、縁成氏が首を吊る場合には机に乗らなくてはいけないのだが、誰かが首吊りを手伝った形跡がある。（たしかに、縁成氏は自らの身長では吊れない高さで死んでいた為、第三者の手引きが不可欠である）しかも御丁寧に、天井にはかぎづめがあり、そこに紐をかけたようだった。縁成氏の死亡理由は絞殺だとみられているが、実際は側頭部の弾痕から、自殺だとみられる。

道具は唯一殺害に用いられたと思われる釘、拳銃だが、釘は血糊<sup>ちのり</sup>が付いたトンカチと一緒にキッチンで見つかった。（指紋は検出できず）問題は拳銃で、書斎で見つかったのはいるのだが、薬莢と

一緒に机に転がっていた（五発装填が可能なフルオートカスタム）。べつたりと縁成氏の指紋が付いている為、縁成氏が瑠璃氏を殺したと見られるが、彼の方が早く死んでいる。別の銃での殺害も考慮して捜査を行ったが、瑠璃氏の銃創（銃を撃たれて受けた傷）から摘出された弾丸の線条痕（弾丸が発射された際についたすじ状のあと。せんじょうしん）これで撃った銃が把握できる為、銃の指紋と言ってもいいが、机の銃と一致していたので、この銃が犯行に用いられたと見て間違いはない。また後の調べで、都内某所で鳶氏が拳銃を購入していたことが判明。しかし理由はわかっていない。

\*

「……おいおい。警察署内で有望視される割には程度が低い内容のファイルじゃないか。報道と大して内容が変わらないぜ？」

「そうですね。全くその通り。…だけどひっくり返して考えてみてください」

むしろそれだけで十分なんだってな。

「紙は見ました？」

「いや、まだだが」

ゆつくりと紙を広げたマツツを横目に、私はゆつくりと缶ビールを呷った。一息つく頃には彼は私に怪訝な表情を向けてはいたが、それは全くの予想通りでおかしかった。

「俺はな、今日はお前がわざわざ何十年だか振りに呼ぶもんだから、キツイスケジュールを空けて来てるんだよ。…なのにお前ときたらなんなんだ！こんなもんを見せてどうしようってんだよ！」

バシンツ！ と、机に叩きつけられた紙。そこには、グー、チョキ、パーが、三角形に描かれていた。

「これが答え合わせに必要なんですよ」

「ああ！？ お前はこのジャンケンの表でわかるっていうのかよ！」  
酒が入ったから荒くなっているのではない。マツツもまた、こ



の事件に因縁があるのだ。

私は紙を拾い上げる。そして、ジャンケンの表に書き加えてから彼に返した。

「これならわかるでしょう……？」

「……………」

私が書いたもの。それは群青一家の名前だ。

「家族の死を改めて見てくれ。明らかに矛盾している部分が何点か浮かびあがっているんです」

「おかしな点……」

マツツーは当時ここまでは看破していた。しかし諦めた。絶対的な、圧倒的な完全殺人によって。

「……死亡順と……殺害方法の矛盾……か」  
そうなのだ。

まず縁成が死に、鳶、瑠璃と死んでいった。しかし矛盾が生じるのだ

「これはジャンケン……三すくみ。限りなく三すくみに近いんです」  
瑠璃を殺したのは縁成。だけど縁成は最初に死んでいる。

鳶を殺したのは瑠璃であろう。十二の子に大人は運べない。

しかし瑠璃は他殺。誰かが生きていなければ、死ぬことはできない。

縁成を殺したのは、両親どちらでも可能だ。ただし、一番最初に死ななくてはならない。

「カードで言うなら、縁成はジョーカー。殺すのは簡単だが、彼の死がこの猫箱の中身を左右するんです」

彼は黙ったままだが、私は続ける。

「シュレディングアの猫箱。書斎が警官によって開かれるまで、書斎は密室だった。だから社員達がやってきた時間帯には生きていたのかもしれない。だけど私たちには疑ってはいけないものがあります」

「検死の確実性を、だろう？」

そう、急に口を開いたマツツーは、吐き出すように言う。

「検死を疑いだしたら俺らみたいな人間はいらない。全部検死の間違いにすればいいんだからな」

忌々しい……。そう呟くと、ゆっくりワインを流し込むマツツー。

「全部俺が教えたことじゃないか」

\*

当時、彼は若くして巡査長だった。

あの頃の彼は、ただ純粹に正義を貫いていた。どんな辛いことだってやってのけたし、休日も省みずに働くことが正義だと信じてやまなかった。

しかし裏切られた。あっさりと。簡単に。

群青家の様子を見て来てくれないか。ちょうどそんなことを困り顔の上司に言われて、はいわかりましたと二つ返事で現場に向かった。

“そこは一種の庭園　ガーデニングと言っても差し支えない出来栄であつた”

到着。インターホンに応答しない為、窓を破って入る。あとで始末書が待っていていようと、目の前の悪事は決して許せない男には無意味な束縛である。

“ガーデニングとは、草木に人が手を加え、芸術の域に仕上げることを言う”

キッチンで気づく。多量の赤い塗料……。血……？

まさか自殺？ いや、ならば家内の風呂場や自室に限られるはずだ……！

彼は玄関を確認する。靴は子供用、革靴、ハイヒールと、綺麗に整えられていた。特に土足で入ったような跡もなく、鍵もかかっていた。外部犯だという線は薄そうだ。

だとすればやっぱり自殺？ いや、全員家にいるはずだ！ 一家心中でもない限り……頼む……。

“その箱庭は、エリザベス女王もビックリな庭に化けてしまった！”

唯一開けていない部屋。

あそこにいる。なんとなくそれがわかってしまったから。

ゆっくりドアノブを絞るように回す。

ゴキヤ！

「ひッ！」

おもわず仰け反ってしまう。閉まっていた鍵はいつの間にか開いていて、まるでこちらへ、こちらへと手招きしているようだった。不気味過ぎるそれに、悲鳴が漏れたことにすら気が付かなかった。

ギイイイイイイイイ、っと軋む戸を開き、真つ暗な部屋を壁伝いにスイッチを探す。何とか出っ張りを見つけて上に押し込むと、ぱあっと明るくなり、

血肉まみれの箱庭へと、誘われた。

\*

「思い出すだけで、机に胃の中身をぶちまけることも簡単なんだぜ？ あれはもう正義とかじゃあ解決できない。概念的なもんじゃないんだ、そういう正義とか悪とか、全く関係ない。一種の災害。天災に近い。今でこそ赤ワインは飲めるがね」

そう言っマッツアーはビンの中身を押し込んだ。まるでもう出てくるなと言わんばかりに。

「……あのあと配属されたお前に全てを叩き込み、俺は引退した」  
ガコン！　グラスが机に叩くように置かれる。

「さあ答え合わせだ。見せてみる。俺に解けなかったこの密室を…

！」

「……わかりました。では始めましょう」

午後十時。まだ物語は始まったばかり。

\*

「まずは外部犯の可能性を説明します。まず私の調べた情報では、

“外部犯は、ほぼあり得ません”」

「他の可能性も鑑<sup>かん</sup>みずにそういうことを言うのは、一体どこの三流警官だ？」

文句を言うわりに、マツターの目は真剣だった。これがブラフじゃないってことくらい、わかってるよな……？

「理由は幾つか。しかし大きなポイントで言えば、ここが都心だということですよ」

大体一時から三時頃が事件発生時間。その頃といえば、昼時と託児所などの帰宅ラッシュである。そんな時間に犯行を行うなんて、正に文字通りの自殺行為。

「更に」

ビールのプルタブを開け、一気に飲み干す。

「全ての鍵がきちんと機能し、部屋はどの部屋も密室だったんですよ。もちろん、“あなたが壊した窓以外はね”」

マツターのワインに向かう手が止まる。

「……例えばだ。宅配を装って玄関から入ってきたらどうする？

ダンボールに犯罪道具でも詰めていたら、そいつが犯人じゃないか。更に重ねよう。世の中には、外側からチェーンを外す機械や道具があるかもしれないじゃないか。その可能性も捨て置けないと俺は思うね」

「検死当時、完全に鍵がかかった状態でした。」これに言えることは、チェーンがかかっていたのだから“玄関からの侵入はあり得ません。チェーンは内側から掛け、内側から取り外す物です。そして、そんな道具は存在しないと、調査班からの調べも出ています。”もつとも、あなたが入ったあとは知りませんけど」

「あつはつは！ 面白いこというなア、アガリ！」

気味の悪い笑い声がリビングに響く。酒が効いてきたのだろう。

「俺が手引きしたってのか？ ありえねえ話だ！ 犯人一味を逃せるわけがねえだろうが！」

「ええ。だからこそ、複数犯の可能性は極めて低い。“家の周囲には会社から来た社員、それに近所の方々の数名が見てらっしゃいました。出て行けるハズがありません”」

マツツーはあれだけ飲んだのに、目がいきいきしているな。

さすがは奇人小説家。

「では次。いよいよ犯行現場に移ります。……まずはキッチン」

「おいおい、書斎じゃねえのか？」

下準備だ。……そう焦るなよ。

「キッチンとリビングの間辺りでしょうか。……ここ。“ここに、明らかに致死量の血痕が見られました。”そして診断の結果、鳶の血液に酷似している為、“鳶はここで殺されたと見て間違いありません”」

特にここに言及はされない。しかし“これは重要なことだ。”

「書斎に移ります」

ようやくか……忌々しい……。そう言いながらニヤニヤする彼は、なんだかマツツーじゃない気がした。

「まずは何からいきましよう？」

「まずは簡単に鳶の死から考えを聞かせてみる」

マツツーは笑う。お前にはわからないとタ力をくくっているんだ。鳶の死体状況は明らかに異質。まず額に穿たれた四本の釘。そして中に刻まれた円……。この場合、何故円が描かれているのかを考

えるのではなく、“なぜ円を描かなければいけなかったのか”を読み解く必要がある。

「こういつた残虐に見える死体には、あることが読み取れます」

「ほお……。そりやなんだ？」

この類の死体には、意味が込められている場合がある。例えば髪の毛に性的嗜好を覚える者の場合、死体の髪が剥ぎ取られていたりなどがその典型だ。

「円というものは円環、つまり輪廻の象徴なんです」

余りに突飛出た妄想。一見ただの妄言。しかしそれは、先程の資料によつて真実に昇華する……！

「言つてみる、根拠を。それが正しいと思つに値する物があるんだろ？」

「はい……。それがこれです！ “鳶は沢山のホルマリソ漬けにされた生物を地下室に持ち込んでいました。”ホルマリソ漬けが日に当たるのが嫌だから地下室を作つた？ いいえ違います！ “家族に特異な趣味をばれるのを嫌つたからです！”」

ホルマリソ漬けとは、死に到りながらも死者の姿を半永久的に残す、不完全な死に様。これを生死の円環に戻す儀式的な意図が読み取れる。

「と、言つてもこれは推測の域にあるのはたしか。……反論は？」

マツツーは鼻で笑い「まあそれが妥当だろう」次を促した。

「では次に書斎です。」

今回のキーワードでもある箱庭殺人。舞台はいわゆる家主の部屋。そこで何故死んでいたのか。いや、死ななければいけなかったのか。「書斎には鍵が掛かり密室の構築が可能です、これには矛盾点があります」

「ほお……」

マツツーはふんぞり返り、未だに余裕ぶっていたが、あきらかに高ぶっている。彼は酒と知欲で理性のタガが狂いはじめているように見えた。

「ボタン錠だからですよ。セキュリティー面において、あまり信頼はできません」

ボタン錠とは、室内側からドアノブの中央のボタンを押すことで施錠する錠前のこと。よく公衆トイレなどに用いられるタイプのものである。

「ボタンを一回押すと鍵が掛かり、もう一回押すと鍵が開きます。だからこそ、こういったトリックが可能です。『ボタンを二回押し、二回目は押し込みながら固定し、衝撃を加えることで開くようにする。』もちろん、『あなたが錠前を捻った時にね』」

案の定睨まれるが、気にせず進める。

「だからこの場合『集められた』というより『集まった』んですよ。多分この日、彼の趣味がバレたんでしょうね。もしくはバレていて問い詰められたのでしょうか」

「ふむ……だがおかしくはないか？ それなら突発的な犯行ということになる。しかし、これは密室殺人。計画的にしか見えないが」やはりそこを突いてくるか。でももう終わりさ。

私は冷蔵庫に向かい適当にペットボトルを見積もると、蓋を開けて口に含んだ。

「ここからは犯人が誰かまでを、一気に語れる自信がありますよ」

「はあん、言うじゃねえか」マツツーはまたビールを煽る。

「それじゃあアガリ。お前が考える犯人とやらを、まずは宣言してみろ。話はそれからでも構わないだろ？」

「……わかりました」

時刻は午後十時半。時効まであと一時間半。

私は腕を振り上げ、思い切り机に振り下ろす！

バアン！ という激しい音が鳴り止み、静かになった室内。

「犯人はお前だ。垣内待造」

その爆発音に似た合図は、俺達の戦いの始まりを告げる音だった。

「っひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃ！ やっぱり最初からそう言うつもりだったんだなア、大東さんよお！」

「外部犯はあり得ないんじゃないのか？ 早速言ってることが違うじゃねえか！」

マツツーの動きが一瞬鈍くなる。

「……なんだって？」

「私はある一つの仮説を打ち立てる」

これが将棋なら、きつと王手。彼の首には死へと誘う鎌がかかっているようにさえ見えた。

「こい。どんな妄言だろうと打ち砕いてやる……！」

マツツは足を組む。傍から見れば、一国の王のそれと違わない。私は息を呑む。これが最後の戦いになるだろう。

一九年間を、今日この時間で終わらせてみせる……！

「……群青瑠璃が、あなたが侵入した際に生きていたという仮説です」

今回の事件で既に明確にわかっていて、それは死亡順序。これが確定しているおかげで、瑠璃は縁成に殺されたが縁成は最初に死んでいるという、明らかに矛盾した状況が生まれた。だから無能な人間は思考を止め、検死の不備を疑うワケだ。

「でも疑わしきはあるんですよ。今回は死亡時間が明確ではなかった



た。おおよそでは出ていますが、きつかりとは出ていない。つまり、  
“あなたが殺しても、時間内であれば辻褄が合うんですよ”  
つまりこうだ。

マツツーが窓を破り侵入する。すると夫と子供を殺した瑠璃が書斎にいて、それを銃殺した。それが一時から三時の間であった。

「おいおい、それはおかしいだろ。“銃には縁成の指紋が付いてたんだぜ？”死んでいる縁成が殺したに決まってるだろう」

「あなたが指紋をつければいい話です」

「わざわざ首吊り死体を下ろしてか？」

俺たちの攻防は続く。彼は闘牛士のように私の言葉を避け、疑問を投げかける。それを一つ、また一つと私は潰す。……まるで終わりの見えない拷問のような戦い。

でもそれは闘技場での話。彼が牛と相対しているのは書斎である。  
「いいえ？ だって、“あなたが首吊り死体を再演出したんですから”」

私は、彼のどてつばらに深々と刺さる角を、思い切り突き上げる  
……！

「調査では、“縁成が死亡した原因に銃殺が含まれています。しかし瑠璃のように線条痕は調べられておらず、別の銃での犯行が疑えます”」

「！ な、なにを……言おうってんだ」

私は息をゆっくり吐き、そして一気に肺に空気を流し込んだ。

ああ、これでさようならだ。

「……“あなたは書斎に入った時におかしな光景を目にします。天井に届かんばかりの高さで子供が死んでいる。そして夫の変死体を抱えて入ってくる妻。あなたは彼女を銃殺し、証拠隠蔽の為に縁成を降ろして指紋を偽装してから、また上に戻した。”これで犯行は完了です」

心臓を捕らえた角が、遂に貫通した瞬間だった。

マツツーは目を閉じ苦悶する。まるで、まるで死に至る一撃を食



時効だ……。

\*

「結局お前は俺を越えられないんだよ！ 失望したぜエ、アガリイ  
いいいいいい！！」

私を刺し殺してしまう。そう思えるほど、力強く指差し罵  
倒する垣内。

「嘘だろ……………？」

「残ア念！もう時効を過ぎて一〇分！ 今から駆け込んでもし捕ま  
ったとしても！ 時効を言い訳に逃げ切れちゃうんですよお、アガ  
リさアああああああああああああん！！」

二五年という歳月は、一体彼に何を与えたのだろうか。

自分の中の正義感を信じて生きてきた男は、あの難事件を期に変  
わってしまった。それは単純で、だけどとても大切なモノ

…………… 価値観。

例えばあなたが花の前を通ろうとする。その際に避けるか踏み潰  
すかという選択となんら変わらないことのように、彼はやってのけ  
た。

「価値観っていうのはな、どんな人間でも、誰もが持つてる。十人  
十色、千差万別。俺の価値観は、人よりちょっとだけ殺人に寛容だ  
ったってことさ！」

つまり犯人に死刑なんて短絡思考に行き着いたってことか？

「ふざけんな！ それを決めんのは司法だ！ 一介の警官が簡単に  
決めていい問題じゃない！」

「ああ、だから俺が決めた。警官の俺が決めたんじゃない、一人の  
人間として、殺したくて殺した！ そのおかげで殺したなんて証拠、  
二五年目でようやく出てきたんだぜ？」

一般的な概念では警察官が家宅侵入時に殺害した、そんなことを  
思いつくハズがない。

思いついても価値観が否定する。正義の象徴が人を殺すなんてありえない。

「むしろ俺にはその考えの方がありえないね。人間に絶対はない。絶対なんてもんがあるなら、根性論を唱えるスポーツのコーチなんかは滑稽だよ。絶対に報われないんだから」

彼は知っている。努力は報われるという言葉が、どれだけ不条理かを。

[illegible]

なんでこんな目に……………そうか、お前がこんな所にやってくるから悪いんだ。だからみんな人生を狂わせ消えてくれ。

頼むから。ここから早く消えてくれ。  
消えろ。

消えろ！消えろよ！

消える。消える。消える。消える消える消える消える  
 る消える消える消える消える消える消える消える  
 る消える消える消える消える消える消える消える  
 る消える消える消える消える消える消える消える  
 る消える消える消える消える消える消える消える  
 る消える消える消える消える消える消える消える

プツツという途切れかたをした刺繍糸のように突然脱力する垣内



彼の胸に刺さるガラス。そう、それはまるで紅い睡蓮のような。彼の慟哭が聞える……。決して理解されることのない思想を抱き、誰にも聞えない声で叫ぶのだ。

「この世に正義はないのか」

\*

その日は辞表を手に、丁度千代田の警察署へと足を運んだのだ。しかし上司はとりあわず、私は踵をかえそうとした時だった。一人の男性が、ゆっくりと近付いてきた。そして、彼はゆっくりと私の肩に手を置き、呟く。

「……君は、詰め込みすぎているだけなんだ。歳はいくつかな？」

「二五です」淡々と答える。それでさえ億劫だった。

「ふむ……しかし、今の御時勢、君のような若者は珍しいな」

「……………そうでしょうか？」

今思えば、彼の優しさは今の私を築いているのだろう。

「私は垣内。かいとうまつぞう垣内松三だ。はっはっは！ 有名な国語教育者と同姓同名だよ。……しかし、人を教える立場には向いていないと、よく娘たちに言われているのだよ。うむ。まあ、…その通りなのだが」彼はそう、小説のキャラのように、私のことを理解してくれているようだった。

「だがね、これだけは言える。君は急いている。それも分不相応な急ぎ方だ。まるで自分を理解していない。……いいかい。成長というのは、一朝一夕で結果が出るものではない。それは成長とは言わないのだよ。沢山の経験、研鑽を積み、“長く良い人生を成しえる”ことが、成長だと私は思うね。……だから、私も君も、成長している途中なのだよ。最も、私も今年で定年だ。成しえる日は近いだろうがね」

気持ちよく笑う男。後に彼が警視庁の重鎮と知ったのは、事件後

に辞職した帰り道だった。

たまたま駅で買った新聞の一面。私は思わず、空を仰いだ。

“垣内氏、自宅で眠るように去る。退職直前の死”

垣内さん……………。

あなたはとうだったんです？

成長できたんですか？

「わからない……………わからないですよ……………」

誰もが、誰もが、私の価値を、存在を否定する。

しかしいざ仕事を辞めれば、まるで時間の流れが違ったのだ。

抛り所を棄てた私には、泥のようにグチャグチャになった、進むことのできないような道が広がっていた。

小説家をはじめた。

けれど目の前には泥道。

後ろも泥道。

いつまで拘束されればいい……………？

もう、イヤだ……………。ここは、苦しい、辛い、寒い……………。ここは…

…イヤだ……………。

だから私は。

それまで私を形成していた価値を、完全に消すことにしたのだ。  
紙に名前を書く。拙い字で“大東 悟”と書くと、それに二重線を引く。

そして、唯一の理解者の名前を借りたのだ。

親愛なる我が友であれ。

“垣内 待造”

\*

「何故今更私がここに君を呼んだか。……………わかりますね？」

「ああ、俺を……………垣内を、殺す為だろ？」

○時三十分

俺はリモコンに手を伸ばす。そしてテレビのチャンネルを適当に回し、

「垣内。お前、確か時計なんて持ってないよな」

「ああ。時間というものが忌々しいからな」

「ケータイも、現場に置きっぱなしだったよな？」

「ああ……！ まさか、お前！」

「その通り」

テレビからは民法のニュース番組が始まろうとしていた。

『こんばんは。午後一時、夜のニュースです』

\*

大東容疑者の担当医と、何者かの会話を収録したものを掲載する。隠れての録音だった為、相手の把握が未だに出来ていない。

「端的に言いましょう。彼はね、二重人格なんですよ」

「へえ。そりやまたなんですか？」

（オホンと、軽く咳き込む音）「彼はね、物事を二つの口で咀嚼する。いわば食べたい口で物を食べて理解していたんです。例えるなら……あゝ、そうですね。林檎があるとします。彼の口の一つ、これを“正”、もう一方を“負”と名付けましょう。さて、正の口が甘味に敏感で、負の口が酸っぱさに敏感だとすれば、あなたはどちらの口で食べます？」

「正ですね」

「そうですね。彼もそうでした。しかし、片方ばかり使っていたが為に、負の口はどんどん、どんどん衰えていきます。困りましたね」

「はい。これは、酸っぱくても我慢して食べるしかないんでしょうな」

「しかしここで周りから反論がくるわけです。『わざわざ酸っぱい方を選ぶな！』と」



「個人の勝手ですよ、そんなもの」

「ですが、彼以外はみんな、口が一つなんですよ」

「……なるほど。周囲の連中が、彼の片方の口が衰え始めていることに気付かないわけですね？」

「彼は周囲の声に怯えながら、あることを思いつきます。『そうか！　一つにすればいいんだ！』と」

「も、もしかして……」

「はい。共食いです。残念なことに、耐えかねた彼の精神は、奇人の精神に喰われてしまったんですよ」

（しばし空白。担当医が躊躇いがちに口を開く）「私の口から真相を語れば、あれは仕方ないことだったんです。彼は事件以前からとつくに死んでいたんです。彼の中には、時間の止まった大東くんの残燭のような魂と、知的快樂を追い求める奇人の魂の二つがひしめき、犯行現場で夫の変死体を持ち込む瑠璃氏を撃ち殺し、箱庭を作り出した」

「指紋は何故、縁成君のものを使ったんでしょう？　鳶氏のもので、同じような状況は作り出せますよね？」

「わかりませんか？」

（数拍空けて）「は、はい」

「そっちの方が面白いからですよ」

「は、はあ？」

「いいですか。彼はね、知的快樂に溺れる奇人なんですよ。……勿論、片方の人格の話ですが。自分の作り出した難解な問いを解ける者と、分かち合いたいんです」

「……一体、何を」

「……それより瑠璃さんの殺人動機についての考察を先にしますかな」（ノイズ交じりに苦笑が聞える）

「事件において簡単にまとめるなら、“フーダニット”（誰が犯人で）“ハウダニット”（どのように犯行を行い）“ホワイダニット”（動機はこうだ）の、三点ですか。犯人は瑠璃氏。犯行は簡単

です。彼女は主婦ですよ？ 睡眠導入剤でも仕込めば、釘打ちも容易です。ただ、ホワイダニットは鳶氏の話をしてから……さつきから跳んでばかりだ。紅茶でも入れて、少し整理しますか。御客人、何に致しましょう？」

「その棚にあるアールグレイで構いません」

「はっはっは……では、しばしお待ちを。」

（ここから三〇分近い間、世間話などが続く）

「……さて、頃合もいい。まず鳶氏の話しましょう。」

彼は私の知己でね。昔はよく二人でカエルを裂いて中身を調べつくしたもんだ。もちろん、研究の一環としてですがね？しかし彼は魅入られた。彼がカエルの臓器を掴みながら言うのですよ。『生命とはこれほどまでに美しい器を抱いて生きているのか』と。……たしか、縁成くんは、銃殺でしたね？」（ここで肯定にの合図が送られたと思われる）

「……なら、彼は解剖するつもりだったのでしょうか？」

（大きな物が倒れる音）「そんな！息子ですよ！？」

「あなたの尺度で考えてはいけません。いいですか？彼の異常性は、地下室の件で明らかなんです。」

……瑠璃さんが壊れてしまうのも頷けます。アガリが言っていた円環というのは、もしかしたら、狂気の中の瑠璃さんの願いかもしれないですね。……元の夫に戻って欲しいと」

「それが、ホワイダニットですね？」

「ええ」

（しばらく食器のぶつかる音が続く）

「……そろそろ御暇します。今日はありがとうございました、先生（立ち上がる音）「では最後に言い忘れたことを」

「？ 难道でしょうか。」

「いいですか？ 狂気は狂気でしか理解しえませんが。もしあなたがこれからこういうような事件に巡り合ったなら、既存の価値観を捨てることをオススメします。……そして気付きましたか？」

「……えっと、何をでしょう」  
「事件と今までの会話との共通点が、浮かび上がってきているハズです」

（息を呑むような音）「……価値観ですか」

録音終了

\*

いつからだろう。あなたは、塞ぎ込む私の傍に寄り添っていた。  
寒いわけでもなく。暑いわけでもなく。両親のように当たり前、  
そこにいる。

ああ、そうか。

これはきっと 理解されるってことなんだ。

私は立ち、前に どっちが北とか、そんなのはわからないけど  
歩き出した。

何十年も座り込んでいた足は役に立たなかったけれど。  
私を支えてくれる人がいたから。

垣内さん。

俺、わかりました。

今、ようやく成し得ましたよ。

何十年もかかったけど。

人も殺したけど。

成し得ましたよ。

私の価値を認めてくれる人が、いましたよ。

\*

二〇二四年 六月二八日 午後十一時三七分

大物作家、自ら交番へ

長年の謎「群青一家殺害事件」結末！

以下は後のゴシップ記事で掲載された内容を一部抜粋

群青一家殺人事件は一九九九年、九十年代最後の謎の怪死事件として世間を沸かせた。内容としては凄惨なものでありながら、まるで悪魔の手で遂行されたような不可能犯罪であると警察やミステリ作家、報道各所を大きく揺るがせた。

（ここからは袋綴じになり、某人の対談の盗聴内容が掲載されている）

また、同僚とのやり取りがあつた為に自首したと垣内自身も語っているが、同僚の名は明かされなかった。（警察は犯人の友人の正体を探り、スカウトをかけるという噂まで出てきている）

遂に今宵、惨劇の舞台のカーテンコールに応じた犯人。

彼は何故、今になって自首したのだろうか……？

真実は未だ、彼の胸に秘められている……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3392n/>

---

ラピスラズリの釈講

2011年6月14日21時55分発行